# 殺人★こみゅにけいしょん

針とら

きっかけは、単なるちょっとした好奇心だったと思う。

雅也としっくりいかなくなって、その頃のあたしはずっと悩んでた。子供の頃からよく、おまえはちっとも悩んでいるように見えない、悩んでいるようにしろって言われて育った。それで悩んでいる顔の練習をした時期もあるけど、やっぱり、まさしく悩んでいるように悩むなんて、そんな器用なことあたしにはできない。

もちろん、最初からその気だったわけじゃなかった。郵便ポストに入れられていた折込チラシを見たときは、ろくに中身を読むこともしなかった。

でも、雅也とまたなんの熱も帯びないやりとりをして、通話を終えたあとに見たときには、啓示に見えたのだ。

折込チラシにはこうあった。

『大切な人を大切と思えなくなってしまったあなたへ

城代大学心理学講座　カウンセリング実験募集のお知らせ』

## 1

「喪失という言葉に対して、皆さんの持っている印象はどのようなものでしょうか」

教壇に立ったおじいさん教授は、そんな問いかけで話し始めた。

お喋りを続けていた人たちも、教授が話し始めると波がひくみたいに静まった。学生時代に植えつけられた条件反射というのは、ずいぶん強いものなのだろう。

「ほとんどの人が、喪失という言葉に対して持っているのは、ネガティブなイメージです。悲しい。つらい。遭いたくない。もちろん、それは当然の感覚です。誰だって大切なものを失いたくない」

あたしは、周囲に座った人たちを見回した。二十人弱ほどの応募者たちは、全員が女性だった。ほとんどがあたしより一回り以上も歳が上。学生でこんなところへ来ているのは、あたしだけか

もしれない。ちょっと居心地が悪い。
「けれど多くの人は見過ごしています。大切なものを失うよりも、もっとつらいことがあるということを。そこのあなた、なんだと思いますか」
教授は先頭に座っていた中年女性に声をかけた。女性は、五十過ぎくらいだろうか。顔の肉に疲労が染みになって吸着してしまったような、ちょっと残念な肌をしている。さあ、と首をひねった。
「それは大切なものを大切だと思えなくなってしまうことです」
教授の言葉に、何人かが頷いた。
「人生に意義があるのは、いつか死んでしまうからです。限りがあるからこそ、人は精一杯輝こうとするのですね。もしも人間が不老不死なら、皆、屍のような人生を送っていることでしょう。大切であるという感情は、いつか喪失してしまうことを知っているからこそ、感じられるものなのです」
逆に人は失うことを忘れてしまうと、大切であることを感じられなくなってしまうことがあります、と教授は言った。
「とても大切な人であっても、一緒にいることがあまりに当然になると、いつか別れがくることを忘れてしまう。すると私たちは愛する人と共にそばにいる幸せをわからなくなって、苛立ったり憎らしくなったりしてしまう。それはとても悲しいことです」
机の上には、事前に封書で提出しておいた、アンケート用紙のコピーが置かれている。用紙は二枚あって、『城代大学心理学講座　喪失カウンセリング実験被験者問診票』とタイトルがある。その下に、マークシートと自由記述、両方の設問がずらずらと並んでいる。
一枚目は自身の健康状態に関するものだ。持病や薬の服用の有無を問う、病院でよくある類のやつ。
あたしは二枚目の一番上の設問に目を落とした。
『あなたがいま一番大切に思いたい人は誰ですか？』という問いの横に、配偶者、子供、孫などの回答項目と、名前記入欄が並んでいる。
二番目以降の設問は、その人物についての詳細を訊ねるものだ。『問1の人物の好きな食べ物はなんですか？』とか、たくさんの質問が並んでいる。ストーカーには垂涎ものの資料といったところだろう。
待機中、みんな他人の回答が気になって仕方なかったために、情報交換をしていた。自然に、大切に思いたい人の設問で、同じ答えをチェックした者同士でかたまった。

一番多いのは『配偶者』のグループ。年齢の幅が一番広いのもこのグループで、三十代から六十代までいろんな人たちが丸を付けていた。会話に聞き耳を立てていて、世の旦那さんは大変なのだなと思った。次に多いのは『実親』のグループで、これは年齢のいった人が多い。介護の話で盛り上がったあと、遺産について語り合っていた。

『子供』に付けている人たちもちらほらいる。『恋人』につけているのは、あたし以外には一人だけだ。

「皆さんにも、大切さを感じられなくなってしまった人がいると思います。でもお願いです。自分を責めないでください。あなたが冷たいからではないのです。それは、その人の存在が、あまりに身近すぎるからなのですよ」

教授が枯れ葉のような顔に仏様のような微笑みを浮かべた。

「今日のカウンセリング実験は、当たり前になった存在をもう一度見つめなおして頂くためのものです。きっと皆さんの心の整理に役立つと思います。それでは一日、よろしくお願いします」

教授がお辞儀すると、教室に拍手が響いた。

あたしは鞄から携帯を取り出した。雅也からのメールが一通も届いていないことを確認すると、鞄に放り込んだ。

事前説明を終えると、まずは心理検査が行われることになった。

教授の研究室の学生だろうか、白衣を着たひょろりと背の高い青年が現れると、無言のままてきぱきと教壇にラジカセをセットした。

それから全員に、プラスチックの板が配られた。ボタンが四個付いたリモコンのようなもので、上には小さなランプ。隅にはナンバーシールが貼られている。

「これからテープを流します。五秒置きに単語が読み上げられますので、その単語の好き嫌いを、手持ちのリモコンで回答してください。一番左のボタンから、好き、どちらかといえば好き、どちらかといえば嫌い、嫌いの順です。押すと上のランプが点灯しますので、きちんと押されたか確認してください」

学生が自分の持ったリモコンのボタンを押し込むと、ランプが緑色に点灯した。

「率直に直感で回答してください。一つの設問に五秒以上の時間をかけたり、前の設問の回答をすることはできません。五秒以内にボタンが押されなかった場合は、その部分の回答は無しということになります。質問がなければ始めます」

学生がラジカセのスイッチを押した。しばらくノイズ音が流れたあと、抑揚のない女の声で

「犬」と読み上げられた。周りで一斉にカチッとボタンを押す音が響いた。あたしも慌てて一番左のボタンを押した。

次々と単語が読み上げられた。取るに足らない単語が多かったが、合間に妙な単語もあった。「涎」には一番右を押した。「キス」にはちょっと迷って左から二番目を押した。さすがに淑女として一番左はためらわれる。

直後にまた「涎」が出ると、みんなが声を抑えて笑った。

「宗教」「自分」など難しい設問もいくつかあった。簡単な質問の隙間に挟まれるので戸惑ってしまった。迷っているとすぐに次に進んでしまうので、途中から直感でともかく押した。

それが終わると、全員で付属の大学病院まで移動した。実際のカウンセリングの前に、健康状態検査と身体測定を行うらしい。

「カウンセリングに何故身体測定が必要なんですか」

ぞろぞろと歩いていると、四十過ぎくらいだろう、主婦らしい女の人が苛立たしげに訊いた。こちらもやはり、残念な肌をしている。

スタッフの学生は、得られたデータの体型別傾向を測ったりするのだと答えた。データ解析のためだけに使い、個人が特定される形にはしないということだ。説明されると、女の人は不愉快そうに鼻を鳴らして、仕方ないわねと頷いた。

裏口から病棟に入ると、携帯電話の電源を切るように指示された。医療装置への影響を避けるためだそうだ。みんな素直に電源を切ったが、さっきの女の人だけは「メールチェックしたいんですけど」と不服を申し立てた。しばらく粘っていたが、やがて渋々切った。

「どういうことですか」

廊下に並べられた椅子に座って案内されるのを待っていると、またさっきの女の人が声を張り上げた。いいかげん面倒くさい人だということがわかり、みんな遠巻きにしている。

スタッフの学生が弱ったような様子で、ぼそぼそと耳打ちしている。女の人は手で振り払い、声を強めた。

「どうして夫が来てるんですか。私、これに参加すること、夫に話してないんですけど」

「それはこちらとしても、わかりかねますが……」

「私が話していないんだから、あなたたちが夫を呼びつけたってことじゃないですか」

「いえ、そんなことは……」

「おかしいと思ってたんです。相手に秘密は漏らさないっていっても、やっぱり夫のことのカウンセリングなんだから、夫抜きで進められないでしょう。呼んだんですね」

「いえ、決して……。ともかく、すぐに来て頂けますか」
学生が弱った様子で言うと、女の人は憮然とした顔のまま、彼に従っていった。ハイヒールが床を叩く音が聞こえなくなると、みんながざわついた。
みんな、こんな実験に参加していることは、配偶者や親に秘密にしてきているはずだ。あたしも雅也に言わなかった。あたしあなたとのことで悩んでるから、カウンセリングを受けに行ってくるね。行ってらっしゃい。ない。どうみても当てつけだ。
漏らされて勝手に呼びつけられていたりしたら、どうしよう。
それはそれで、雅也と話し合う機会になるだろうけど、あとでどんな顔されるかわからない。
「さすがに、こちらに内緒で相手を呼びつけるなんてこと、しないと思うけどね」
隣の席に座っていた女性が、あたしに話しかけてきた。
『恋人』に印をつけていた、あたしより三歳年上のＯＬだ。木下由香里と名乗った。
「法律的にやばいっしょ。守秘義務違反っていうの？　このご時世だもの、大学の教授が大々的にそんなこと、できないでしょ」
「じゃあ、なんだったのかな……」
「旦那が文句を言いに来ただけじゃないかな。あの人はああ言ってたけど、なにかの弾みで、匂わすようなこと喋っちゃったんだろうね」
「興味を持たれてるだけいいと思うわ」
別の主婦が豪快に笑った。
「うちなんかもう会話が一切ないから、知られようがないわよ」
すぐに別の学生が現れ、皆に順番に検査室に入るように言った。検査室は五つあって、それぞれの部屋で問診と測定を行うということだった。
順番がくると、あたしは一番右の部屋へ通された。
小さな診察室だった。身長体重の測定器が据えられていて、心電図の装置もある。人の姿はなかった。二つあるパイプ椅子の一つには、くまのぬいぐるみが置いてある。やたらやる気のないくま、をキャッチフレーズに近頃売り出している、若い子たちに人気のぬいぐるみだ。『人生ってクソだよね』と書かれた白い旗を持って、つぶらな瞳で宙を見やっている。
すぐに先生が来ますのでお待ちくださいと言って、学生が部屋を出ていった。あたしは椅子に腰掛けて、くまの前で待った。五分ほど待った。何処か遠くから救急車のサイレンの音が聞こえた。十分ほど待った。また救急車が通りすぎていった。急患でもあったのだろうか。
見続けていたくまの瞳から視線を外したときには、もう十五分経っていた。

部屋を出て係の人に訊こうかと思い、立ち上がると、ちょうど部屋の奥のドアが勢い良く開いた。
学生ではなく、中年の男だ。くたびれた白衣を着て首から聴診器をかけている。ドアノブを掴んだまま、首だけ部屋の中を覗き込んだ。
目が合うと険しい顔をした。
「あなたが北原真紀さん？　根本雅也さんのお連れさん？」
「あ、はい。よろしくお願いします」
慌てて頭を下げてから、言い回しが引っ掛かった。
お連れさん？
「すぐ来てください」
男はそれだけ言うと、足早に身を翻した。あたしは慌てて部屋を出た。
廊下に人の姿はなかった。男は振り返ることもなく、ずいずいと早足で歩いていってしまう。
「あの、検査は別の部屋でするんでしょうか」
「はい？　検査？」
「身体測定とか、健康診断をすると聞いたのですが」

「身体測定？　なんでそんなことするんです」
あたしは眼を瞬いた。
「意識不明の状態です。今手術中です。大丈夫ですか？　私の言ってること、わかりますか？」
「あの」唇を湿らせた。「……誰が？」
「雅也さんに決まってるでしょう」
男は言うと、また足早に歩き始めた。あたしは後を追った。入り組んだ廊下を奥に抜け、エレベーターの前で男は足を止めた。
「雅也さん、大学の前で事故に遭われたんですよ」
ボタンを押すと、振り返ってそう言った。
「ついさっきのことです。信号無視のトラックに撥ねられたようです」
「どうして……」
「何かカウンセリングの集まりがあったとか？　それで来ていらしたんじゃないでしょうか」
「でも、相手に漏らすことはしないって言われたんですけど……」
「それはよくわかりませんが。私は大学病院の勤務医で、心理学研究室のことはよく存じませんので」

やはり、内緒で相手を呼び出して会話の機会を設けるようなカウンセリングだったのだろうか。それとも、自分で気づかないうちに、雅也に漏らしてしまったのだろうか。

今日ここに来ることについて、雅也に話した覚えはなかった。最後に雅也と話したのは、三日前の電話だった。電話口の向こうでゲームをやりながら、上の空であたしの話を聞き流す雅也に、もうダメなのかな、と呟いた。呑気な調子で、え、なに？　と訊き返す雅也の声を聞いて、泣きそうになって電話を切った。

「雅也は無事なんですか」

「なんとも言えません。一応、最悪の覚悟はしておいて頂けますか」

とろとろと降りてくるエレベーターを待っている間、頭の中で、え、なに？　と問いかける間の抜けた雅也の声が繰り返し再生された。

エレベーターで四階へ上がった。男が受付で何か言うと、ナース帽をかぶった女が廊下の奥を差した。男は黙ってその方向に目を向けた。

しばらく待ったが、廊下の奥をじっと見つめたまま、口を引き結んで黙っている。痺れを切らして、声をかけた。

「あの、雅也は」

男は何度も唇を舐めてから、ようやくといった感じで口を開いた。

「手術は終わりました。雅也さんは、廊下の一番奥の部屋です。お心を強く持ってください」

「雅也は無事なんですか？」

「雅也さんは、廊下の一番奥の部屋です。お心を強く持ってください」

「無事なんですか？」

「お心を強く」

「雅也は」

「強く」

「あの――」

言いかけて、やめた。どうも肝心のところを言う気はないようだった。

あたしは息を吸い込むと、廊下を歩き出した。男はついてこない。リノリウム張りの廊下に、あたしのたてるヒールの音が響いた。

廊下の一番奥の部屋のドアをノックした。返事はなかった。取っ手を握ると、ドアを横に滑らせた。病室はカーテンが掛けられていて薄暗かった。中央にベッドがあるだけの閑散とした部屋だった。

ベッドへ歩み寄った。
かけられたシーツが大きく膨らんでいる。顔の部分に、大きな白い布がかぶせられて覆い隠している。独特の匂いに気づいて見やると、脇で線香が焚かれている。
大きく息を吸い込んだ。白い布に手を伸ばした。
――真紀、と笑う雅也の笑顔が脳裏に過ぎった。
付き合いだした当初の、弾けるような笑顔。
一息に布を剥ぎ取った。
寝そべったくまのぬいぐるみが、頬杖をついて、あたしを見上げていた。
『人生ってやっぱりクソだよね』と書かれた旗を握っている。
天井の蛍光灯がついて、部屋が明るくなった。
「おつかれさまでした」
ドアが開いて、教授が入ってきた。後ろから、他のスタッフも入ってきた。あたしを導いてきた男もいる。
教授は仏のような笑みをあたしに向けた。
「カウンセリング実験終了です。わかりますか？　今のはお芝居です。雅也さんが事故に遭ったという事実はありません。雅也さんはピンピンしていますよ」
ピン、ピン、と教授は枯れ枝のような体で両手を上げて胸を張ってみせた。
「わかりますね。雅也さんは無事ですよ。何も心配することはありません。事故はありませんでしたよ」
なぜくどく繰り返すのかわからない。わかっています――言おうとして口を開いた。
言葉が出なかった。
どうしていいかわからなくなり、息だけ吐いた。それで、自分がずっと呼吸を止めていたことに気付いた。深呼吸、と教授が言った。命じられるまま、息を吸って、また吐いた。
途端、足から力が抜けてその場にへたりこんだ。
控えていたスタッフが、背中からあたしを抱きとめた。見上げると、さっきいろいろと文句を言っていた女だった。サクラだったらしい。
教授があたしの脈を測り、まぶたを開いて覗き込んだ。
「大丈夫。休憩室で休んで頂いて」
スタッフに指示してから、あたしに目を合わせた。「歩けますか？」
あたしは頷いた。

口を開いたが、舌が乾いていてうまく言葉が出てこない。
教授が、ベッドの上に寝そべっていたくまのぬいぐるみを差し出した。柔らかなぬいぐるみを抱きしめていると、やがて気分が楽になった。
「途中から」
「はい」
「気付きは、したんですけど。たぶん、そうだと思ったんですけど」
「ええ」
「でも、ダメでしたね」
あたしは目元だけで笑んだ。教授もにっこり笑った。
「それだけあなたは雅也さんを、大切に思っていらっしゃるのですね」
不意に温かいものが頬を伝った。教授がハンカチを差し出した。あたしは首を振り、自分のハンカチを取り出して目元を拭った。ガンダムの柄があしらわれたそのハンカチは、昔、雅也にプレゼントされたものだ。
休憩室に入ると、そこら中で泣き声がしていた。みんな、犬、猫、イルカ、アルマジロなど、様々な種類の動物のぬいぐるみを抱きしめ、顔を伏せて啜り泣いていた。

由香里も目元にハンカチを当てている。隅で携帯を手にうずくまっているのは、さっき夫と会話が一切ないと言っていた主婦だ。カジキマグロのぬいぐるみを小脇に抱えながら、無事なの、無事なの、と電話にまくしたてている。
あたしはポケットから携帯を取り出し、電源を入れた。
メールが一通届いていた。雅也からだ。たった一文のメールだった。
【なにしてる？】
あたしは電話をかけようとして……やめた。まともに話せる自信がない。
【今日逢いたい】と送ると、すぐに【ＯＫ！】と返ってきた。
嬉しくて胸が詰まった。まるで初めてデートに誘われたときのようだった。
しばらく休憩してから、またあの心理検査を受けさせられた。最後にまた教授が現れ、実験の総括と、今そばにある幸せの大切さを語り、解散となった。

結局、その実験とデータで学術的な何が明らかになったのかは、あたしには最後までわからなかったし、特に興味もなかった。頭のいい人たちが論文や学会で議論することなんて、あたしには関係ないことだ。

ただ、自分にとって雅也がかけがえのない存在であることがわかった。
キャンパスを後にするとき、鮮やかに咲き誇った桜の木々を見上げながら。
あたしは、それがすべてだと思っていた。

2

通話を切ったあとも、しばらく携帯を握りしめたまま呆然としていた。何をどうして話が噛み合わなくなったのかわからなかった。
大学入学時から間借りしているマンションの窓から、雪化粧に白くなった家々の屋根が見えている。結露した窓の表面に並んだ『バカ』の二文字が、零れ落ちはじめた水滴で歪んだ。泣いているみたいだと思った。
すぐにメールの着信音が鳴った。雅也からだ。

【俺たち、いいかげん、距離置いた方がいいのかもな】

あたしはまぶたを閉じた。耳元でわんわんと耳鳴りがするようだ。窓に額を押し付け、頭を冷やした。
しばらく、ひんやりとした感触に身を浸してから、炬燵にもぐりこんだ。
ノートパソコンを引き寄せる。
ブックマークを開き、そのページに接続した。

【喪失の小部屋】

グレーのシックな色合いの壁紙に、タイトルが表示されている。タイトルの下には『城代大学喪失体験カウンセリング出張所（非公認）』と記載されていた。
あの実験の後、参加したみんなが寄りあって始めたサイトだ。はじめは実験参加メンバーだけの運用になっていたが、試みに一般公開すると口コミで広まり、今では人気サイトになっている。あたしは設立に関わってはいないが、由香里からメールが回ってきたので、ときどきアクセスしていた。
ページにはずらりとチャットルームが並んでいる。人数制限つきの2ショットチャットで、入

室した当人たち以外は、会話の内容を見ることができないようになっている。
名前を入れる欄の横には『遺族』と『通知者』のラジオボタン。
あたしは『遺族』にチェックを入れると、自分の名前の欄に『マキ』と入力した。大切にしたい人の名前の欄に『マサヤ』と打ち込む。
『年齢』、『相手との関係』、『喪失の形態（事件、事故、病気）』などの任意記載項目を埋めた。ある程度の情報がないと、チャットをする上で食い違いが生じ、雰囲気が出ないという注意書きがある。
しばらく待っていると、ビープ音が鳴って、『林（医師）』が入室してきた。
有志の死亡通知者役の一人で、あたしも過去に一度、チャットしたことがある。当初は通知者役は運営メンバーが行っていたのだが、利用者の増加にともなって手が回らなくなり、有志を募ったようだ。林以外にも何人かが常駐し、チャットに参加している。
通知の仕方は人によって様々だ。林のように、正統派の医者役として喪失相手の病死を宣告する者もいれば、飲酒運転のドライバーになりきって、相手を轢き殺したことを告げる者もいる。
飲酒運転ドライバー役とは以前やって、真に迫ったチャット技術に引き込まれたが、あとでリアルの職業が長距離トラックの運転手だと聞いて、それはちょっとどうなのだろうと思った。

【（病室の中。ベッドに横たわったマサヤの顔には、白い布がかけられている）】

林がチャットを始めた。
描写の仕方は人によって個性が出るところだ。最初から最後まで会話のみで進める人もいれば、小説のように詳細に〝地の文〟を書く人もいる。状況がわかりにくくても雰囲気が出ないし、あまり詳細に記述しすぎるのも、作り物めいてしまうという欠点がある。

【マキさん。残念ですが、マサヤさんは先程息を引き取られました。】
【……どういうことですか？】
【マサヤさんは以前から、肝臓癌を患っておられました。もう長くはもたないと本人もわかっているようでした。】
【嘘です！　そんなの、私聞いたことないです。先生だって、ちょっと働きすぎなだけだって言っていたじゃないですか】
【あなたにだけは言わないでくれと、マサヤさんに頼まれていました。あなたに心配をかけたく

なかったのでしょう。（林、マキに二枚の紙切れを渡す）　これを、息を引き取る間際に、マサヤさんから預かりました。一緒に行けなくてごめんということでした】

【これは？】

【映画のチケットです。あなたが観たいと言っていたのを、マサヤさん覚えていらしたんですね】

映画に行きたいと雅也に言って、興味がなさそうにあしらわれたことは、以前チャットをしたとき、世間話で林に話していた。それを覚えていて、小ネタに使っているようだ。

感動を狙っているのだと思うが、ちょっとあざとい気がする。心配をかけたくないから癌のことを言わないというのも、考え方が安易ではなかろうか。どうして言ってくれなかったのか、理由を掘り下げてもらえないと、ちょっと納得できない。心配をかけたくないだなんて上辺の言葉で表すのは表現として陳腐だ。雅也のあたしへの気持ちを、その内面を、もっと鋭く、抉るように深く描写してほしいところだった。

ちなみにあたしは読書家だ。

なぜか誰もあたしと本の話をしてくれない。

【そうだったんですか】

【雅也さん、あなたを愛していらしたんですね】

【……そうですね】

もう一つ愛が感じられない死に様に終わった。一応、雅也の遺体に縋って泣くところまでやったが、入りきれないままチャットは終わってしまった。これでは死んだ雅也も浮かばれない。

〈林さん、そうだよねえ〉

由香里に電話すると、携帯の向こうで弾んだ声が聞こえた。あの実験の日以来、ときどきこうして電話をする仲だ。

〈私も一度やったんだけど、コウちゃんが私に宛てた最期の手紙とか持ち出してくるんだもん。テレビドラマだったらそれで泣くんだけど、趣旨違うだろって〉

由香里はからからと笑う。

由香里には耕介という年下の彼氏がいて、あの日喪失体験したのも耕介だという。以来、耕介としっくりいかなくなるたび、チャットを利用しているらしい。

利用者としてのみならず、由香里はサイトの立ち上げにも関わっていた。遺族役だけでなく通

知者役としてもチャットをこなし、死亡の告げ方が真に迫っていると、人気の通知者役の一人になっている。
〈私の場合、死亡事実と状況だけ告げて、なるべく相手に想像させるようにしてるんだけどね。相手の脳内スクリーンに、喪失対象の死の映像を再生させたいっていうか〉
由香里はデートのことでも話すように弾んだ声でそう言う。もともと人とのコミュニケーションが好きなタイプらしい。自分の話術（チャット術？）を発揮するのが楽しいのだろう。
〈でも男の通知者たちって、愛の手紙とか死ぬ間際の一言とか、そういうドラマティックなのが好きなんだよね。通知者役が勝手に盛り上がったら、遺族がついていけないと思うんだけどなあ〉
〈マニュアルを作るって話はどうなったの？〉
〈難航中。初期メンバーの間でも、意見がまとまらなくって。ほら、みんな、喪失相手バラバラだし〉
恋人以外に、子供や親を対象としている人も多い。いろいろ勝手が違うらしい。
〈そのへんはもう、相性と経験かなって思ってる。人それぞれ、いろんな事情があるからね。この前、夫の喪失をやったんだけどさ。私は、癌で亡くなった設定でやったんだけど、遺族役の人、どうもしっくりこないらしくてね〉

〈うん〉
〈で、今度は年配の通知者が、ちょっと別の病気の設定にしたわけよ〉
〈別の病気？〉
〈性病にしちゃった〉
あらら。
〈あとで聞いてわかったことなんだけど、どうも旦那の浮気が引っ掛かってたみたいなのよねえ。心の奥で旦那の昔の浮気を許しきれてなかったみたい。今更蒸し返すのも……と思って生活を続けるうちに、旦那のことが本当に大切なのかどうか、わからなくなっちゃった〉
人間、割り切れないものを溜め込んだままだと心が膿むのね――由香里は言って、ずずっと飲み物をすすった。
〈旦那がそんな死に方したところを想像したら、膿みを吐き出した感じで、すっきりしたみたい。それからは私も、必ずしも淡々と死亡通知をするばかりではないなあって思ってる〉
〈由香里はどうして通知者役、やってるの？〉
〈なんだろうね。人の役に立ちたいのよ。そうすることで、自分の居場所が欲しいのかもね。相変わらずコウちゃんとは死んだ直後しかうまくいかないしさあ〉

ひどいもんよね、と由香里は笑った。まったくだ。
〈真紀も通知者役、やってみない？　きっと真紀なら上手くできると思う〉
〈私には向いてないよ〉
昔から引っ込み思案で、人とのコミュニケーションは苦手だった。自分がリードして、見知らぬ人の喪失を演出していくだなんて、とてもできる気がしない。
その後は、二人で雑談をした。あたしは雅也のことを、由香里は耕介のことを愚痴り、どうしたもんかね、と二人で笑った。
〈その奥さん、それからは旦那さんとうまくいってる？〉
電話を切る間際、そう訊いた。
〈うん。なんだかんだで、旦那さんのこと大切みたい。ときどきチャットに来てストレス発散しながら、元気にやってるよ〉
由香里は苦笑して付け加えた。
〈旦那、この前は浮気相手に刺されて、殺されちゃってたみたいだけどね〉

＊

日曜の渋谷駅改札は人でごった返していた。
待ち合わせの十分前に到着した。メールを入れようと携帯をいじっていると「わっ」と声がかかって、あたしは飛び跳ねながら振り向いた。
「へへ、驚いてやんの」
両手をポケットに突っ込んで、悪戯気な顔をした雅也が立っていた。
雅也からちゃんとしたデートに誘われたのは、本当に久しぶりだ。付き合いだした頃は、よくこうやって待ち合わせのときに悪ふざけをしていたのだ。サークルでもお調子者で通っていた雅也は、女の子からよくもてた。
「さ、行こうぜ。ほら」
雅也はポケットから、映画のチケットを二枚取り出した。
「観たいって言ってたろ」
「……ほんとに覚えててくれたんだ」
「ほんとに？」
雅也が首を傾げた。

あたしは慌てて首を振った。チャットの中で死にゆく雅也がチケットを遺してくれたのだ――などとは、とても言えない。
「すごく嬉しい」
「ほんと？　よっしゃ！」
雅也はパッと顔を輝かせ、ガッツポーズをとった。周りを行く通行人たちが苦笑している。行こうぜ、とあたしの手を引っ張って歩き出した。その右手の薬指には、しばらく付けていなかったペアリングがしっかり填まっている。
二人で映画を観て、カフェに入った。雅也はにこにことよく喋った。あたしを楽しませようと、懸命に頑張ってくれている。
あたしは自分が恥ずかしくなった。こんなに自分のことを想ってくれている人のことを、どうして信じられなかったのだろう。
【雅也さん、あなたを愛していらしたんですね】
林の言葉を思い出した。病室のベッドに横たわり、顔に白い布をかけられた雅也の姿が頭に過ぎった。
「おい、真紀、どうしたんだよ？」

知らず目から涙が零れていた。なんでもない、とあたしはココアのカップに口をつけながら、首を振った。
「ごめんね雅也」
「大丈夫か？　どうしたんだよ」
「なんでもない。ただ、ごめんね」
雅也が不思議そうに首を傾げ、よくわかんないけど気にすんなよ、とあたしの頭を撫でた。ザク柄のハンカチを出すと、あたしの涙を拭った。
もう大丈夫だ。
もう雅也を死なせなくても、やっていける。

その日、あたしは雅也の部屋に泊まった。雅也の腕に頭を乗せ、満ち足りた気分で眠った。
喉が乾いて、夜中に目が覚めた。穏やかな寝息を立てる雅也の寝顔を見つめてから、起こさないようにベッドから滑り出た。冷蔵庫から麦茶を取り出して口にふくむ。
ふと、部屋の隅に置かれたノートパソコンが目に留まった。
電源が付いていることを示すランプが点滅している。そういえば、ずっと低い駆動音が響いて

いる。気付くと、妙に耳障りに感じた。
終了させてしまおう。
ノートパソコンを開いた。雅也はパスワードを知られていないつもりだろうが、以前打ち込むところをこっそり覗いて覚えてしまった。ロックを解除した。画面いっぱいに、ブラウザが表示される。

【喪失の小部屋】

表示されていたのは、見慣れたウェブサイトだった。
あたしはまぶたをこすった。寝ぼけて、無意識のうちにいつも開いているページを、表示させてしまったのだろうか。
違う。
頭が覚めてきた。雅也は、あたしがチャットをするのを覗いていたのだろうか。いや、会話している当人たち以外は、チャットの内容を見ることはできないはずだ。
ふと、デスクトップ上に置かれた、いくつかのテキストファイルの存在に気付いた。

ファイルを開くと、保存されたテキストの羅列が、画面いっぱいに広がった。

【(全裸の真紀の死体が床に転がっている。脇には巨漢デブの合田の姿)】

あたしは目を瞬いた。

【美味かったぜえ。おまえのオンナ】
【おまえ、なんだよ！　真紀をどうしたんだよ！】
【帰り道に襲ったのさ。クロロホルムで眠らせて、車に連れ込んだ】
【なんだってっ？】
【裸にひん剥いて、その若くみずみずしい果実のような肉体を、たっぷり味わわせてもらったぜ。良かったぜえ。真紀ちゃん、犯られながら、雅也雅也って泣くんだよ】
【てめえ！　畜生ぶっ殺してやる！！】

こ、これは……。

あたしはパソコンのキーボードを操作し、いくつかのテキストファイルを開いて読み進めていった。どれも雅也のチャットのログファイルだった。チャットの中で、あたしは合田に、毎回異なる実に様々な変態的趣向でレイプされ、殺されてしまっていた。なんということだ。

真紀、と雅也の声が聞こえ、あたしは黙々と読み進めていたモニタから顔を反らした。

振り返ると、ベッドの上で雅也が寝返りを打って、あたしがプレゼントしたくまのぬいぐるみを抱きしめていた。ぬいぐるみはやる気なさそうに頬杖をついたまま、雅也にぎゅうぎゅうと抱きしめられている。『人生って素晴らしいよね（棒）』と書かれた旗を握りしめながら。

あたしはじっとモニタを見つめた。

【真紀を返せ！！！　返せよお！！！！！】

ちょっと感嘆符を使い過ぎではないだろうか。

3

チャットルームに『雅也』が現れたのは、一週間後のことだ。

あたしはコーヒーを一口啜ると、炬燵に入ったまま、ノートパソコンを手許に引き寄せた。名前の欄に、あらかじめ決めておいた偽名を打ち込む。性別は『男』を選んだ。マウスで『通知者』にチェックをつけ、入室ボタンをクリックする。

【雅也さんですね。神崎です。はじめまして】

【よろしく】

【大切にしたい人は、恋人の真紀さん、でよろしいですね】

【はい】

自分でやる気になったのは、合田の描写のあまりの下手さに、腹が立ったからだ。自分の欲望を満たすことばかり考えていて、殺されるあたしのその惨めで恥ずかしい姿や感情が、ちっとも伝わってこない。表現力も酷い。いまどき、〝若くみずみずしい果実のような肉体〟はないだろう。表現が陳腐すぎる。

雅也があたしを失って、本当に悲しんでくれたのかも気になった。チャットはどうも演出過剰

で、いまひとつ真意が読み取れなかったからだ。雅也があたしを失って本当に悲しんでくれるなら良しとしよう。そうでなければ殺され損だ。

【では雅也さんと真紀さんは恋人、私は真紀さんを殺す殺人犯ということでいきましょう。殺害方法にご要望はありますか】

【真紀は喉もとが凄く綺麗なんです。あと、うなじも】

思わず頬が熱くなった。

雅也がそんな風にあたしを見てくれていたなんて知らなかった。

【では、首周りは傷つけないようにしますね】

【いや、そうではなくて】

あたしは首もとを撫でていた手を止めた。

【真紀の喉もとが傷つけられて殺されたりしたら、俺、やるせない。より喪失感が湧くと思うんです。おかしいでしょうか？】

おかしいでしょう。確認するまでもなく。

【わかりました。ではロープか手で首を絞めて殺しましょう】

【はい】

【それとも焼殺とかの方がいいですか？】

【え。黒焦げはどうなんでしょう】

残りは設定を固めず、アドリブでやることになった。ト書きはなるべく少なくし、想像に任せる方針とする。

舞台はあたしの寝室に決まった。思わずあたしはノートパソコンを持って、寝室へ移動した。

では、開始。

【(雅也、真紀の寝室のドアを開ける)】
【(そこには神崎が立っている)】
【……おまえ、誰だよ?】

あたしはモニタから顔を上げ、寝室のドアを見やった。ドアを開けて入ってきた雅也が、戸惑って立ち尽くす姿を想像する。
雅也の目の前には、見知らぬ男――神崎が立っている。あたしは神崎になったつもりで、ノートパソコンを持ったまま、部屋の中央に立ってみた。
雅也は何を思うか。神崎をあたしの浮気相手かと思うに違いない。強張った顔をしている。
片手で入力した。

【おまえ、この女の恋人か?】

と神崎は横たわったあたしの死体を顎で示すのだ。あたしの死体は、首すじが青黒くなった無残な姿で、ベッドに横たわっているということにしましょう。

あたしは鏡に映った自分の顔を見てみた。
殺人犯らしい、ふてぶてしい表情をしている。

【……真紀?】
【死んでるよ。俺が殺した。こう、両手で首を絞めてよ】

ノートパソコンを置いた。鏡の向こうで、あたしは両手をかざし、恍惚とした表情を浮かべている。ちょっと気分がよろしい。
次に、ベッドに仰向けに倒れてみた。見知らぬ男に首を両手で抑えられたつもりで、じたばたともがいてみた。手が硬いものに触れた。目覚まし時計だった。

【ばたばたともがきやがって、時計で俺の頭を叩いて逃げやがった】

あたしはベッドから飛び下り、ドアに向かって走った。
途中でカーペットに滑り、つるりと転んで尻から床に倒れこんだ。部屋がどすんと鈍く揺れた。

【可哀想に、転ばなければ逃げ切れたかもしれないのになあ】

なお逃げようともがくあたしを神崎は背中から羽交い締めに。悲鳴をあげられると面倒なので、口を抑えることにしましょう。再びベッドまで連れていくよりも、やっぱり床に押し倒すことにして。

あたしはカーペットに両膝をつき、激しくキーボードを叩いた。

【床に叩き伏せて、二、三度頬を打ってやったら、大人しくなったぜ。それから首に両手をのせて、体重をかけていった】

なんて可哀想なあたし。サービスだ。

【真紀ちゃん、雅也雅也、って泣いてたぜ】

雅也からの応答はなかった。

少し、書きすぎたかもしれない。興奮していたのが急速に醒めてきた。

雅也はもう飽きて、ゲームでもしているのではないか。この頃の雅也は、あたしが何か話していても真面目に聞いてくれない。そのたびにあたしは、自分が必要とされていないと感じる。

【凄い！】

しばらくしてようやく応答が返ってきた。

【凄く上手いですね！】

褒められた。

【いやあ、臨場感があって、思わず魅入ってた。なんか、ほんとに部屋で、目の前で真紀が殺されたみたいな気がしたよ。何か打とうと思ったんだけど、嘘になっちゃう気がして】

本当にショックを受けたときに、キーボードを打ち込む余裕はない。それでもキーボードでしか意思疎通の手段がないところに、喪失チャットの限界があると由香里は論じていた。

【何回かチャットしたけど、こんなに上手いの初めてだ】

雅也が興奮しているのがチャットの文面からでも伝わってきた。こちらが返事を返す前に、どんどんと打ってくる。

【なんというか、殺し方に愛があった】

【愛？】

【記号みたいにされちゃうと、入り込めないんだ。真紀っていう存在を感じたいんだ】

てらいのない言葉に、頬が熱くなるのを感じた。

【存在を感じて、その上で殺されないとだめでさ】

結局、殺されるのかあたし。

【あまり一人で盛り上がられると引いちゃうし、逆に遠慮されても入っていけない。神崎さんのは、容赦ないけど、なんか愛があって凄く良かったよ。レイプの描写ばっかりやたら詳しい人が多くて、ちょっとどうかと思ってたんで】

それ以前にいろいろちょっとどうかと思うところはある気がしたが、まあ気にしないことにする。合田のことを言っているのだろう。チャットの使用目的を履き違えている人が紛れ込み、一部で問題となっていることは知っていた。

その日のチャットは、それでお開きとなった。

雅也にせがまれ、あたしはフリーで登録したメールアドレスを教えた。またやろうと約束し、チャットを終えた。終わり際、雅也はこう云った。

【なんだか、真紀と話したくなったな】

ブラウザを閉じると、あたしは我知らず鼻歌を歌っていた。こんなに雅也との会話が弾んだのは、本当に久しぶりだった。

そうだ。思いつき、雅也に電話をかけることにした。今このテンションであれば、リアルでの会話も弾むに違いない。

タイミングのいい電話に、雅也は驚いた様子だった。すぐに勢いこんで話しかけてきてくれた。あたしも喋りはじめた。上手く話せなかったこれまでのあいだの溝を埋めるように。

けれど、次第に沈黙が二人の間に沈んだ。

会話は熱を帯びてはくれない。

やがて雅也はまたいつものように、上の空になってしまった。

〈じゃあ、またね〉

電話を切ると、あたしはノートパソコンの画面を覗き込んだ。

吐息をついた。

どうして普段の会話で、こうやって喋ることができないのだろう。

＊

雅也はあたし扮する神崎とのチャットを、すっかり気に入ったようだった。他の通知者たちの誘いは断って、あたしとのチャットだけするようになった。

【神崎さんのに比べたら、他の人のはつまらなくてさ】

あたしの殺され方は様々だった。ロープや手で首を絞められたり、青酸カリの入ったコーヒーを飲んで喀血したり、テロリストの仕掛けた爆弾を解除できずに吹っ飛んだりなどした。

辞書を調べてみると、殺害方法というのは驚くほどバリエーション豊かなものだった。撲殺にはじまり、刺殺、射殺、絞殺、扼殺、毒殺に爆殺、轢殺に天誅殺など、試しきれないほどいろいろな種類がある。もう特許とかとればいい。チャットをする日は、鏡に映った自分の身体を覗き込みながら、今日はどうやって殺そうかうきうき考えるのが習慣になった。

雅也があたしの死体と対面する場所も様々だった。病院、無人島、孤島の洋館、ニューヨーク

のスラム街。サバンナでライオンに食べられてしまったのは、さすがにやりすぎだったと二人で反省した。
馬鹿なことをやっているという自覚はあった。
それでも自分の死に様を雅也に見てもらうのは楽しかった。
あたしが綺麗な服を着ても、化粧を変えても、雅也は興味を示さない。でもあたしの死には、泣いたり悔しがったりしてくれる。それが嬉しかった。毎回同じではなく、変化をつけると雅也の反応も変わる。それが楽しかった。
それは雅也も同じようだった。

【なんか、凄く呼吸が合うんだよ。こういうの、相性っていうんだろうな】

殺しを重ねるうち、あたしは殺される自分を、妙に冷静な目でみつめている自分に気付いた。
殺人者のあたしは、雅也を喜ばせようとしている。だからこうやって楽しく会話ができる。でも死んだあたしは、何もせずにただ雅也に愛してもらおうとばかり考えていた。だからうまくいかなかったのだ。

優越感と嫉妬を同時に感じた。だってどれだけ神崎が雅也を楽しませても、それで雅也が涙を流すのは、死にゆくあたしを愛しんでのことなのだ。
ひょっとしたら、自分はずっとこうやって、自分の中の何かを殺してしまいたかったのかもしれない。
あたしはあたしの首すじを切り裂きながら、そう思った。

＊

目が覚めると、リビングから明かりが漏れていた。
時計を見ると、夜中の三時だ。テレビの音が聞こえている。電気を消し忘れたのかと思って、ベッドから抜けだした。
「あ、真紀。お邪魔してる」
炬燵にもぐりこみ、雅也がポテトチップスをつまんでいた。
テーブルにはレンタルＤＶＤのケースが積まれている。すべて、機動戦士ガンダムだった。
「来てたんだ」

合鍵は渡していたが、連絡なしに雅也がやってくるなんて珍しい。
「起こしてくれれば良かったのに」
「気持ちよさそうに眠ってたからさ」
「終電でも逃した？」
ヤカンに水をいれ、コンロにかけた。雅也が夜中にやってくるのは、会社の飲み会で終電を逃したときくらいだ。
「いや、今日は飲んでないよ」
雅也はテレビに目をやったまま答える。
「コーヒーにする？」
「いいよ、寝てな。すまん、起こしちまって」
「大丈夫。何か用があったんじゃないの？」
「え？」
「え？」
「なんで？」
「だって、こんな時間に来てたから」

「ごめん。迷惑だったか？」
「いや、そうじゃなくて」
「ボリューム下げるよ」
「何か用があったのかなって、思っただけで」
「え？」
「え？」
「……用がなきゃ来ちゃ駄目なの？」
寒々しい声音だった。
雅也はポテトチップスの袋を空にすると、テレビの電源を切った。ビームサーベルの音が消えて静かになると、部屋に佇む空気の寒さが、尚更強く感じられた。
雅也は立ち上がると、ＤＶＤケースを鞄に放り込んだ。
「俺帰るよ。起こしちゃってごめんな。真紀は寝てな」
「でも、電車ないでしょ」
「漫喫にでもいるわ」
「でも……」

雅也は構わず、じゃあな、と玄関のドアを閉めた。それから、わざわざ外から鍵を閉めた。ガチャリというロックの音が、拒絶の音に聞こえた。

あたしは冷たいドアに額を押し付けて、しばらくじっとしていた。雅也の靴音が遠ざかっていく。どう話をすればいいのか、昔は意識せずともできていた当たり前のことのやり方が、今ではどうしてもわからない。

ふと思いたち、炬燵にもぐりこむと、ノートパソコンを引き寄せた。前に使ったとき電源を切っておくのを忘れていたのか、スタンバイモードになっていた。

立ち上げ、ブラウザを起動する。喪失の小部屋の名前入力欄には、クッキーで保存された『神崎』の文字があらかじめ入力されている。ルームを作成した。

駅前の漫画喫茶まで歩いて七分。果たして、雅也は入室してきた。

【神崎さん。こんな時間にいるとは思わなかった】

【眠れなくてな。そういう雅也はどうした？】

【ちょっと、いろいろあって】

【真紀ちゃんと喧嘩でもしたか？】

自分が卑怯なことをしている自覚はあったが、止められなかった。

【そんなようなもん】

【うまくいってないのか？】

ちょっと間をあけてから、返事がきた。

【俺、どうしていいかわからないんだよ。この頃、いつもそうだ。今日こそは楽しく話したいと思っても、話してるうちに、何かが少しずつずれてくる】

意外だった。雅也はもうあたしのことなど、興味がなくなってしまったのだと思っていた。

どう話していいか困っていたのは、雅也も同じだったのか。

【もう別れようかと思ったこともある。でも踏ん切りがつかなくて、そんなときにチャットをみ

つけたんだ。喪失を体験してみて、それでもう本当に心が離れてるんだってわかったら、そのときはきっぱり別れるつもりだった】

あたしはしばらく息を止めていた。雅也が別れを考えていたなんて、知らなかった。

あたしが気付かなかっただけで、喪失はすぐそばにあったのだ。チャット上のごっこ遊びではない、本物の喪失が、ずっとそばに。

【でもやっぱり、失いたくないって思ったんだよ】

目尻に涙がたまった。鼻からは鼻水がでた。全部ハンカチで拭きとって、下に零さないのがあたしの誇りだった。

【まだやり直せるはずだって思ったんだ。それでも、どうしていいかわからない。もう終わりにしようって何度も思った。でも、まだなんとかなるって、信じたくて】

自分たちは二人で同じことを思っていたのだ。でもそれを話し始めてしまったらきっともう後に戻れないことをわかっているから、背中で会話を続けていたのだ。

殺し殺されしている間は、そんなこと忘れていられるというのに。

【俺、何やってるんだろう】

ほんとだよ、とあたしは返した。ほんと、あたしたちは何やってるんだろう。

その日のチャットは、そんな話だけで終えた。聞いてくれてありがとな、と雅也は云い、今度リアルで会おうぜ、と云って落ちた。もちろんリアルで会うわけには、いかなかったが。

電源を落とす前に、ふと気付いてメールボックスをチェックした。

近頃は神崎用のアカウントばかりログインして、他のアカウントのチェックをしていなかったのだ。

メールが溜まっていた。何十通と。

すべて同じ差出人だった。

【真紀さんへ。
その後いかがですか。近頃、チャットでお見かけしないのは、忙しいからでしょうか。また真紀さんとチャットしたいです。ご連絡お待ちしております。　林
追伸。雅也さんはお元気ですか。雅也さんを亡くされたい場合は、是非ご一報ください。】

4

【お返事ありませんが、どうなっていますか。いつでもご連絡ください。ご希望の喪失方法があれば、対応しますのでお伝えください。こちらの予定は気にしていただかなくても大丈夫ですよ。
林】

新着メールを確認すると、あたしは講義室を抜けだした。ゼミの教授が非難がましい目で見てきたが、気にしない。
〈なかなか暴走が止まらないみたいねえ、林さん〉
電話口の向こうで、由香里は落ち着き払った声を出した。先日相談をしたときは狼狽えていた様子だったが、何かいい対策を考えついたのかもしれない。
〈ストーカー化ってやつだね。コミュでの話から察するに、真紀、通知者役の中で結構人気だったみたいだから〉
喪失チャットのファンが作ったコミュニティが、ＳＮＳ上に出来ているらしい。喪失体験の心理的効用について語り合うという名目だったが、もっぱら各遺族役や通知者役のうわさ話ばかり交わされているということだった。
〈特に林さんが真紀を気に入ってるのは、有名だったみたい。コミュの人たち、さもありなんって反応だった〉
〈何度かチャットをしただけなのに〉
〈勘違いする人もいるんだって。真紀、相手のチャットが拙くても、気を遣って泣いたりしてあげてたでしょう？　自分のチャットで相手がいい気分になったと思って、舞い上がっちゃうんだ〉
〈どうすればいいの〉
〈迷惑メールにフィルタリングしちゃえばいいじゃん〉
〈そういう問題じゃないの〉
あたしは鞄から封筒を取り出した。

昨日の夕方、ポストに届いていたものだった。封筒の表書きは真っ白で、消印はない。直接届けられたということだ。中には便箋が一枚。
中央に一言だけ、印字されている。

『殺してやる！！！』

〈感嘆符が三つもついてるのよ〉
〈住所を教えたの？〉
〈林さんに？　まさか〉
〈何か地域を特定されるような情報を漏らさなかった？〉
〈雅也と行く予定だった映画館の名前は、云ったかもしれないけど〉
〈そういう些細な情報の積み重ねで、辿られたりするんだって。ともかく、今は相手の出方を待つしかないよ〉
由香里は警察へ相談することには否定的だった。チャットの運営側の立場としては、問題が大きく発展するような事態は避けたいのだろう。サイトには、『利用者間のトラブルについて運営側は一切責任を負わない』という一文が追加されていた。
通話を終え、あたしは考え込んだ。
由香里を頼っても仕方ないようだ。だが現時点で警察に相談しても、あしらわれるだけだろう。どうすればいいのだろう。林が現実で雅也を傷つけるなんて、あるはずないとは思う。けれどそのことを考えるとたまらない。そうか、これが喪失の疑似体験か、と妙に納得した。
雅也に林のことを警告するとなると、必然的にチャットの話題に触れざるを得ない。それは避けたい。あたしがチャットをしていることは秘密にしている。あたしが神崎だと気付かれたくない。雅也と自分を繋ぐ細い糸を、失いたくなかった。
考えた末、神崎のアドレスから、メールを打つことにした。あたしが警告することはできないが、神崎ならできるのだ。無性に雅也と話したいのに、話すことができるのはあたしではなく神崎。自分の中の殺人犯を妬ましく感じる。
いつの間にか、雅也が自分では手を触れられない、とても遠い場所にいってしまった気がした。

＊

【どういうこと？　なんで、その林って人が、俺に何かするんだ。俺、その人とチャットしたこともないのに】

神崎の名前で雅也をチャットに呼び出した。事の次第を告げると、雅也は不可解そうな反応を示した。

当然だった。林とチャットしたのはあたしの方なのだ。あたしの喪失相手として自分が出演したことを、雅也は知らない。あたしに関する部分を省いて話そうとすると、噂で聞いたんだが、という曖昧な説明にならざるを得ない。

【名前を使い分けていたんじゃないか】

なんとか、雅也が身辺に警戒してくれるように仕向けなければならない。あらかじめ考えていたカバーストーリーを打ち込んだ。

【おまえがチャットをした通知者役の中に、『林』が紛れ込んでいた。それで、おまえに目をつけたとか】

【いや悪戯だろ。この前もあったんだ。この頃、神崎さん以外のチャットを断ってたら、結構悪質な誘いとかきてさ。反応するから面白がるんだ。構ってたらきりがない】

雅也はにべもない。

無力感を感じた。雅也はあたしの言うことなど、聞いてはくれないのだ。

【そんなことよりさ、久しぶりにチャットやるかー？】

【そんなこと？】

伝わらなさが苛立ちに変わった。

心配しているのに、あたしを死なせることばかり考えている男なんてもう知らない。

【こんなチャットの方が、そんなことじゃないか。おまえ結局、死ねば誰でもいいんだろ。別に真紀を好きなわけじゃないんだろ】

【ふざけんな。違えよ。真紀じゃなきゃ駄目なんだ。真紀だと思うから、チャットだとわかってても気持ちが揺れるんだって。なんだよ。そんな風に思ってたのかよ】

どうしてその言葉を現実で言ってくれないのだ。なぜあたしでなく殺人犯に言うのか。

【なあ、一度リアルで会わないか？　直接話がしたいんだ】

見知らぬ殺人者を誘うより、恋人に話しかけてやってほしい。

自分は少しずつ死んでいるのだと感じた。神崎に殺されるごとに、どうにもならない関係に、ゆっくりと殺されているのだ。

でも真紀ちゃんを死なせないでくれよ。殺される前に、おまえ助けてやれよ。そう打ち込んでから、消した。

もう終わりなのかもしれない。ずるずると引き伸ばしていただけで、本当は雅也との関係は、とっくの昔に終わりを迎えていたのかもしれない。

こんなチャットのことなど、もう忘れよう。

そうすれば終わりかけた恋愛に縋るのも、諦められるかもしれないと思った。

＊

林からのメールは、そのうち来なくなった。

ひょっとしたら、下手に大事になる前に、由香里が裏で警告を入れてくれたのかもしれない。もしそうならばありがたかった。

大学から帰り際、マンションの郵便受けを開けると、封筒が一通入っていた。

例の白い封筒だった。開封すると、便箋に一言、

『殺してやる！！！！！！！』

部屋に戻ると、林宛てに機械的にメールを打った。

【もうあのチャットには行きません。次やったら警察に通報しますのであしからず。

あと感嘆符が多いです。記号に頼るのではなく文章全体で表現してください。】

すぐに返事が返ってきた。

【やっぱり、メールしつこかったでしょうか。すみません。もう送りません……。でも感嘆符ってなんですか】

何かピントがずれている。

手紙のことではなく、もうしばらく前に止まっていた、メールのことについて詫びているようだ。感嘆符はビックリマークのことだ。

考え込んでいると、チャイムが鳴った。あたしは封筒を机に置き、部屋を横切って玄関のドアを開けた。

立っていたのは見知らぬ男だった。

にやにやとした笑みを浮かべ、あたしの全身を舐めるように見つめている。

――ああ、そうか。

その顔を見た瞬間、あたしはほぼ直感で理解した。

メールの送り主は林さんだったけど、封筒の送り主は、違う人物だったのか。

「会いたかったぜ、真紀さん」

男があたしに手を伸ばしてきた。顔にハンカチを押し当てられた。視界が無数の黒猫の絵柄でいっぱいになった。ジジか。

足先から力が抜けて、あたしはへたりこんだ。

男があたしの身体を抱える。遠くなっていく意識の隅で、殺されるのかな、と思った。あたしが殺されたら雅也はどうするだろう。

イメージトレーニングだけは完璧なのだった。

## 5

部屋の中は薄暗かった。

埃のこびりついた窓の向こうから、弱々しい陽の光が射し込んでいる。壁の漆喰はあちこち剥げ落ちていた。傾いた丸テーブルの上に安物のコートが放り出されていて、ポケットから黒猫模様のハンカチがはみだしている。

意識を取り戻したあとも、自分が何処にいるのかわからなかった。窓の下には、荒れ果てた庭

が広がっている。どうやらここは二階らしい。
木材が剥き出しのベッドの上に、あたしは横向けに寝かされているようだ。
立ち上がろうとしたが、上手くいかない。手首と足首を縛られている。口には捻った手ぬぐいを噛まされていた。なかなか、それっぽい。
「起きた？」
突然声をかけられ、あたしは顔をあげた。
部屋の隅に若い男が一人、椅子に腰掛けてこちらを見やっていた。二十代半ばくらいだろうか。ロゴ入りのTシャツを着込み、下は磨り減ったジーンズを穿いている。見たこともない男だ。
「手脚、きつかったりしない？　結構強く縛っちゃったんで」
そばまで寄ってくると、あたしの口もとの手ぬぐいを外した。中腰になってあたしを見下ろした。
一瞬迷ったが、叫ぶのはやめておいた。周りに人などいないだろう。
「意外に痩せてるのね」
「ん？」
「チャット上では、巨漢デブって書いてたから。もっと脂ぎった人をイメージしてた」

「あれ。なんで知ってるの？」
「あなた合田さんでしょ。本名は知らないけど」
自分が雅也に云ったことだ。おまえがチャットをした何人かの中に『林』が紛れ込んでいた、と。あれは真実を突いていたのだ。
チャットの中で、あたしを殺害し、愉しんでいた男。
合田は、ああ、と理解の色を浮かべた。
「おれと雅也のチャットのログを読んだんだね？」
「読んだ」
「……どうだった？」
「若くみずみずしい果実のような肉体」
皮肉のつもりで引用したのだが、通じなかったようだ。合田は満足そうに頷くと、部屋の隅から椅子を持ってきて、あたしのそばに座った。
遠くでトラックのホーンの音が聞こえた。公道からそう離れてはいないらしい。打ち捨てられた民家か何かに連れ込まれたのだろう。
「普通のセックスって、満足できなくてさ」

合田はあたしを覗き込みながら続けた。
「太古からの狩猟本能っていうのを満たしたいんだろうね。合意の上で女とやっても面白くない。狩りをしたかった。でも現実ではなかなか機会がない」
「雉でも撃ってなさい」
「雅也の奴は良かったよ。悲嘆の具合が真に迫ってた。奪ってるって感じがぞくぞくしたよ」
「ちょっと理解できない」
「でも雅也、他の奴とばかりやるようになって。なかなかチャットする機会がなくなっちゃってさ。欲求不満で死にそうだったよ。男は狩りをしてないと駄目なんだ」
「雉でも撃ってなさい」
「それで、深夜に医者を装って電話したんだ。電話番号は聞いてたからな。真紀さんがトラック事故に巻き込まれて亡くなったって言ってやったら、あいつ大慌てだった。チャットの比じゃない反応で。面白かった。ハマった」
合田は病院の草陰に潜み、血相を変えてやってきた雅也を捕捉して後を尾けた。それであたしの家がわかったのだ。
夜中に雅也が部屋に来ていた日のことを思い出した。病院の受付で話を聞き、電話が悪戯だったとわかった後も、あたしの無事な姿を見るまで安心できなかったのだろう。
そうやって合田は何度か電話をかけて、雅也の慌てぶりを楽しんでいた。
雅也が注意を真に受けてくれなかったのは、何度も合田の悪戯を受けていたからだったのだ。
「でも雅也の奴、酷いんだぜ。もう関わるなって言うんだ。真紀ちゃんが死ぬのを望んだのは、あいつ自身なのに。だから――」
合田はテーブルに置かれたコートの下から、ナイフを取り出した。
カバーを外して肉厚の刃を見せつける。
「真紀ちゃんがこんなことされてるって知ったら、雅也、どんな反応すると思う？」
合田は携帯電話を取り出し、液晶画面を示した。パネルには、雅也の電話番号が表示されている。
あたしの脇に屈みこみ、通話ボタンを押した。
〈……はい〉
雅也の声が聞こえた。
「よう雅也。合田だ。あのな、今、俺、誰といると思う？」
芝居臭く間を空けてから、言った。

「真紀ちゃんだぜえ」
ぷつっ、と電話が切れた。
雅也が切ったのだ。
合田が舌打ちし、リダイヤルをかけた。
「おい雅也。行動に気をつけろよ。真紀ちゃんを誘拐した。警察に連絡したら、彼女の命は――」
ぷつっ、と電話が切れた。
合田はもう一度リダイヤルをかけた。何度も呼び出し音が鳴るが、なかなか出ない。
「待て。切るな」
ようやく繋がると、合田は慌てて言った。
雅也は黙っている。
「真紀ちゃんは今俺といる。証拠に声を聞かせてやるぜ」
携帯を差し出され、あたしは目を瞬いた。合田を見上げると、喋れ、と顎を振られた。何を喋ればいいのかわからない。
迷ってから、とりあえず、雅也？　と声を出した。
それから合田に首を振ってみせた。合田は携帯を取り上げると、耳に当てた。

「聞けよ！」
受話器の向こうからは、機動戦士ガンダムの歌が大音量で流れていた。
「おい雅也！　てめえ！　舐めてるとまじキレるぞ！　真紀ちゃん犯すぞ！　犯し殺すぞ！」
合田がしばらく怒鳴っていると、燃え上がれ、燃え上がれ、と繰り返していた歌が遠のいた。スピーカーにでもかざしていたらしい。
〈合田さん。いい加減、こういうのやめませんか〉
辟易した声音だった。
〈俺も実際チャットやってたから、警察に言うのとかあまり乗り気じゃなかったけど、これ以上やるなら通報しますよ〉
「わかってねえようだな。通報したら、真紀ちゃんの命は――」
〈通報しますね〉
「おい待て！　ちょっと待て。落ち着くんだ。誤解がある。今回は本当なんだ」
〈俺からすると、合田さんのやり方って、なーんかリアリティが感じられないんです。通報したら命がないとか、そうやってすぐにドラマのテンプレートみたいな台詞言うでしょ。若くみずみずしい果実のような肉体、とかないですよ。どんだけセンス古いんですか〉

あたしは胸を撫で下ろした。雅也のセンスはまともなようだった。
「じゃ、じゃあ、どう言えばいいんだよ」
合田は泣きそうになっている。
〈自分で考えてください〉
雅也はにべもない。
〈ともかく、俺はもう結構なんで。こういうのやりたいなら他の人探してください〉
「待てよ。おい。あれだぞ。真紀ちゃんが――」
雅也の指摘に深く傷ついたのだろう。合田は逡巡したが、上手い言い回しが出てこないようだった。
「こ、このままだと、殺すけど、いいのか？」
〈いいとも〉
ぷつっ、と三度、電話が切れた。
もうリダイヤルしても、話し中のアナウンスが流れるだけだった。合田は呆然とした顔で、あたしを見下ろした。
あたしは首を振ってみせた。一言呟いた。この状況にこれほど相応しい言葉はないだろうと思いつつ。
「狼少年」
「くそっ！」
合田は携帯を床に叩きつけようと振り上げたが、そのまま力なく腕を下ろした。
「正気の沙汰じゃねえよあいつ！」
狂気の沙汰にある誘拐犯が叫ぶ。
「私の携帯は持ってきてないの？」
「あ？」
「あなたが私を誘拐した証拠を示せればいいわけでしょ？　誘拐された私の携帯から電話してやれば、雅也もさすがに信用するしかないでしょう。持ってこなかった？　テーブルの上にあったはずだけど」
「いや、すぐにおまえ車に運んだから。部屋の中とか入ってないぜ」
あたしは舌打ちをこらえた。「どうして気がつかないかな」
「慌ててたんだよ」
「あのね。私の携帯から電話をかければ、雅也は当然、私からだと思って電話に出るでしょ。無

意識に、私の元気な声を期待しながら、電話に出るのね」
「だからなんだよ」
「そうやって期待させておいてから、真紀を殺害してその電話を使ってるんだって宣告してやるの。そうすると、元気な私の声を想像していたぶん、雅也のショックはより深くなり、印象に残るのよ。どうしてそんなことに気が回らないの」
「どうしてそんなことに気が回るんだよ」
「携帯でネットに繋げられない？　電話が駄目なら、メールにしましょう」
「同じだろ。それにメールはたぶん、随分前から着拒されてる。いくつかアドレス変えて送ってみたけど、全然返事がないんだ……」
合田は項垂れた。思わず、しょんぼり、という擬態語を付けたくなる。
「それなら私のアカウントを使いましょう。うまく雅也に言いきかせるから、代わりにメール打って」
「そ、そんなこと言って、俺を騙そうっていうんだろう！　駄目だぞ。そんなの。騙されたりしないんだぞ」
すっかり自信を失くしたのか、どうにもちぐはぐな台詞回しで合田が言う。

「あなた、雅也の前で私を殺したいんでしょ？　ただ殺したいわけじゃなくて、雅也の前で、雅也の悲嘆を愉しみながら。なら協力してよ。呼び出すから」
合田はしばらく目をきょろきょろさせて迷っていた。
しばらくして、初めてのお使いを任せられた小さな子供のように、こくりと頷いた。
あたしが教えたアカウントでウェブメールにログインすると、チャットで待っている旨入力し、雅也のアドレスに送信した。それから喪失の小部屋を開き、『神崎』の名前で待機した。

【おっす！　こんな時間に珍しいな】

雅也はすぐに気付いてやってきた。おまえどんだけ神崎が好きなんだ。
「どういうことだ？　これって雅也なのか？　おまえら、なんでチャットで話してんだ？　神崎って誰だ？」
「真紀ちゃんを誘拐した、って打って」
合田は不可解そうに首を捻っていたが、言われた通りに入力した。

【……どういうことだ？】
「そのまんまの意味だよ。おまえリアルでやりたいって云ってただろ」
【なんの冗談だ？　本気なのか？】
「本気だ。リアルで人を殺してみたくなった」
【やめてくれ神崎さん。俺、あんたのこと信じてたんだぞ！】
「ハッ。信じたおまえが悪いんだよ。可哀想にな。真紀ちゃん、今、縄で縛られて、怖がって泣きながらおまえを呼んでるぜ」
「どこが怖がって泣いてるんだよ」
「いいからそう打って」
【てめえ。本気みたいだな。真紀に何かしたら、ただじゃおかねえぞ！】
「来いよ雅也。チャットの再現をしようぜ。おまえの前で真紀ちゃんを殺してやるよ。――ここの住所打って。何かわかりやすい目印も。できれば地図サイトもつけて！」
合田はかちかちと激しく携帯のキーを叩いた。
【すぐ行く！　そこで待ってろ！　今から出発するから、三十分後くらいに着くからな！】
「早く来ないと真紀ちゃんが死体になっちまうぜぇ、って打っていいか？」

「いいと思う」
【真紀に手を出したら、ぶっ殺してやるからな！　じゃあ、またあとでなっ！！】

雅也がチャットを落ちた。
合田が興奮した様子で、携帯を見つめている。来いよ、と口元に笑みを浮かべ、悪役の演技に陶酔している。雅也の反応が良かったので、機嫌をなおしたようだ。
これで精一杯だった。
雅也が神崎の言葉を真に受けて、警察に届けてくれれば一番良かったが、雅也の反応を見る限り、望み薄そうだ。文末に小さい「っ」まで打っている余裕があるのは、真に受けていないということだろう。
おそらく雅也は、神崎がリアルで会う誘いにのってきてくれた――そう思っているはずだ。油断しきって、わくわくしながらやってくるだろう。そんな状態で、ナイフを持った合田に太刀打ちできるだろうか。
雅也が負けないよう、援護しなければならない。あたしは腕を捻ってポケットの中を探った。

「来たみたいだぜ」
窓に張り付いて外を見張っていた合田が言った。まるで秘密を共有する悪友に聞かせるような声音だった。
待っている間の一番の不安は、合田が気が変わってあたしを害そうとしてくることだったが、その気はないようだった。雅也の眼前で殺してやるのだと嘯いている。
この男は、ただ後に引けなくなっているだけなのだろう。自分がごっこ遊びをしているに過ぎないことを認めたくないだけの、ただの子供だ。やめるきっかけを作ってやらないと、自分から矛を収めそうにないのが厄介だ。
「おい、来たぞ！　どこにいる！」
雅也の呼びかけが聞こえた。
合田の脇から見下ろすと、埃の浮いた窓の向こう、庭の真ん中に雅也が立っていた。デートのときに来ていたのと同じダウンジャケットを着込み、建物を睨みつけている。
叫んで居場所を知らせたくなった。が、なんとか呑み下した。

今は、あたしの恐怖を演出してしまうようなことは厳禁だ。これはごっこ遊びでなくてはならない。リアリティはいらない。現実であることを合田が認識したその瞬間、合田の中で何かが後戻りできないスタートラインに据えられてしまうのではないかという気がした。
「ここだ雅也」
合田が窓を開け、雅也に向かって顎をしゃくった。あたしは頭を引っ込めた。
「真紀ちゃんもここにいるぜ」
「真紀の姿を見せろ」
「応じないで」あたしは小声で合田に指示した。
雅也は合田のことを神崎だと思っている。その上で恋人を浚われたという演技をしている。つまり雅也は実際には、あたしがここにいるとは、思っていない。
今あたしが顔を出せば、混乱するだろう。本当に浚われたのだとわかれば、パニックに陥る可能性が高い。そうなれば、ごっこが壊れてしまう。
「いいのか？」
「怪我してるとでも言って。その方が盛り上がるでしょ」
「確かに」

合田はにやりと作りものめいた角度で口もとを吊り上げた。いちいち演技が薄っぺらい。窓の向こうへ声をかけた。
「悪いな雅也。真紀ちゃん、自分の脚で歩けないんだわ」
これみよがしにナイフをかざしてみせる。
「痛くて、歩けないってよ」
しばらく、雅也からの応答はなかった。
「なんて顔してんだ。嘘だよ。面白い奴だな」
「……真紀はどうしてる」
「縛って転がしてある。無事だよ。傷つけてない」
「今からそっちに行く。真紀に手を出したら殺す」
その言葉は、思わずぞくっとするほど真に迫った気迫に満ちていた。ごっこ遊びにしては、真剣すぎるほどに。
雅也の姿が玄関口へと向かう。
「な、なんだよあいつ。偉そうに」
合田は、雅也の気迫に焦ったようだ。チャットや電話越しの殺人鬼ごっこでは、相手に強い感情をぶつけられることなどなかっただろう。
もうやめれば――あたしは言いかけたが、合田は耳に入らないようだった。
「……いったん気絶させるか」
合田はナイフをベルトの鞘に収めると、コートのポケットをまさぐった。
部屋の入口、開かれたドアの向こうから、床が軋む音が聞こえてきた。雅也が階段を昇ってくる。
合田がドアの脇に身を潜ませ、息を殺した。不意打ちを喰らわせるつもりだ。
あたしは足で床を蹴った。
どん、という振動とともに、階段の足音が止まった。
「出てこい合田」
雅也の呼びかけが響いた。聞く者を芯から震わせるような、強い怒りを帯びていた。
合田は黙っていた。口を引き結び、ハンカチを握りしめた手を震わせている。怯えているのだ。もうどちらが犯人かわからない。
「こんなこと、もうやめるんだ」
「……もうやめない？」

雅也の呼びかけに、あたしも重ねた。これが合田があたしを解放する最後のチャンスだ。雅也がこの状況を見る前にあたしを解放してくれれば、なんとか場は収められる。雅也と相対してしまったら、合田はもう後戻りできない。

合田はあたしをちらりと見た。迷うように目が揺れたが、すぐに視線を戻した。引く気はないようだった。それでもあたしにナイフを突きつけて雅也を脅すまでの覚悟は持てないところが、この男の小心なところなのだろうと、他人ごとのように思った。

雅也の足音が近づいてくる。ドアの向こうに姿を現した。

ベッドの上にあたしの姿を認めて、雅也は足を止めた。

真紀――と口を開きかける。

奇声があがった。横合いから合田が跳びかかった。タックルを仕掛け、雅也を廊下の手摺りに叩きつける。雅也の顔を手で塞ぐように、ハンカチで覆いこんだ。

雅也の身体が一瞬、よろめいた。

次の瞬間、雅也が合田の両手首を掴んだ。わめく合田を押し返す。合田がよろめき、たたらを踏んだ。ハンカチが舞った。ガンダム柄だ。黒猫柄のハンカチは、あたしのポケットの中にある。

雅也の拳が合田の顔面を捉えた。合田がわあっと声をあげて鼻を押さえる。その腹に、雅也は容赦なくもう一発叩き込んだ。合田が潰れたカエルのような声をあげ、床にうずくまった。

雅也は合田に構わず、あたしの方を見た。

「真紀！」

その目にパニックの色はない。

転がったあたしに駆け寄った。大丈夫、と頷いてみせると、素早くあたしを後ろに向かせ、手首のロープに手をかけた。固く結ばれたロープを外しにかかる。

「……気づいてたんだ」

背中越しにあたしは言った。

雅也は、出てこい合田、と呼びかけていた。出てこい神崎、ではなく。

あたしが本当に浚われたことを、見破っていたのだ。

「合田からあんな電話があったからな。はじめはまた悪戯だと思ったけど、やっぱり不安になってさ」

安否を確かめようと、雅也はあたしの携帯に電話をかけた。繋がらずにやきもきしていたところで、〝神崎〟から全く同じような誘いを受けたのだ。

「おかしいだろ。今まで誘っても断ってきてたのに、急に合田と同じタイミングで誘ってくるな

んてさ。すぐにわかったよ。なんかまずいことになってるって。だからチャットの延長上に思ってるように、偽装して返事をした。俺がごっこにノッてやってるうちは、合田も真紀を傷つけないと思ったんだ」

雅也もあたしと同じ考えだったらしい。こんなところででも通じ合っていたのが、なんとなく嬉しかった。

窓の向こうから、パトカーのサイレンの音が近付いてくる。雅也が通報したのだろう。

手首を自由にすると、雅也は足首のロープに手をかけた。

「こんな状況じゃないときに、誘ってくれれば良かったのに」

固く結ばれたロープを緩めながら、ぽつりと呟いた。

「待ってたんだぜ。リアルで会おうって言ってくれるの。――打ち明けてくれるの」

「……気付いてたの？」

あたしが神崎だということに。

「前、夜中に部屋に入ったときに、ノートパソコンを開いたからな。喪失の小部屋を表示させたら、名前入力欄に『神崎』ってあった」

雅也と口論になったあの夜だ。

そういえば、あのとき、ノートパソコンがスタンバイモードになっていたことを思い出した。あれは、雅也が使ったからだったのだ。

「笑ったよ。そういうことか！　って。やけに俺のことも真紀のことも詳しいから、なんか妙だとは思ってたんだ」

では、その後の雅也のチャットは、全部神崎をあたしと知った上でのものだったのだ。雅也が神崎に語った言葉は、すべてあたしに向けられたものだった。

出し抜かれていた。悔しい。

何が悔しいって、あたしじゃなきゃ駄目なんだというあの言葉が、あたしに伝えようと打たれたものだったことを、信じられなかった自分が悔しい。

ごめんな、と雅也は呟いた。

「もっと早く、こうして正面きって話しあえば良かったんだ。不安なことや不満なことを、素直に言い合えば良かったんだ。なのに俺、真紀に嫌われたくなくて。それでチャットに逃げて、何度も真紀を殺させちまった」

「私もごめんね」

素直に言えた。

「私も何度も雅也を死なせた。もうしない。もう、チャット越しに話すのはいやだよ」
「じゃ、もう喪失チャットはやめにしようか。史上最悪の殺人鬼神崎、これにてお縄ということで」
ロープが解けると、雅也は抱え込むように強くあたしを抱きしめた。
あたしも雅也を抱きしめ返した。
……これですべて終わったのだ。神崎と真紀は一人に戻った。
これからもすれ違いはあるかもしれない。でも、その都度向かい合って話し合いながらやっていけばいい。やっていけるはずだ。
あたしは雅也の胸に、そっと顔をうずめた。頭の中で、ハッピーエンドを告げる音楽が流れはじめた。

「いやちょっと待てよ」
無粋な声に仕方なく顔をあげた。
振り向くと、合田が腹を抑えて突っ立っていた。
いけない。すっかり忘れていた。――というのはさすがに嘘で、縛ったりしなくていいのかなあとちょっと気になっていた。せっかくいい雰囲気だったので、忘れることにしたのに。
「待てよ、おまえら。仲、冷えてたんだろ」
合田は新種の珍獣でも見つけたような目で、抱き合ったあたしたちを指さした。
「だってほら、死なせてただろう。それは、だから、あれだろ？　つまり、いろいろあるけど、だめだろそれは。離れろ。おい、まず離れろ。いいな？　まず、離れる。話はそれから」
雅也とあたしは固く抱き締めあったまま、合田をみつめた。
沢山の足音が階段を昇ってくる。警察だ、と叫ぶ声。
合田はそれも聞こえない様子だ。あたしたちをさした指をわなわなと震わせた。顔が紅潮している。
「騙したのか？　なあおいおまえら、俺を騙したのか。俺がどんな気持ちでこんなことしたのか

わかってねえのか！？　俺を利用したのか！　離れろ！　そんな目で見るな！　抱き合うな！　やめろ！　おいやめろ！　こっち見んな！」

あたしと雅也は目を見合わせ、次の瞬間ぱっと飛び退いた。

合田の目が血走っている。しかも今にも泣きそうだ。やばい。

合田がナイフを引き抜いた。

腰だめに構え、あたしへ向かって突進してきた。

そういえば、何度かナイフで刺されて殺されたなあ。そんな思考が頭を過ぎった。

身体に衝撃が走って、あたしは尻餅をついた。

「真紀！」

雅也が合田を突き飛ばした。警察だ、という沢山の叫び声が部屋の中に雪崩込んでくる。取り押さえられる合田の姿を、あたしは床に座り込んだまま見ていた。うーん、それっぽいなあと感心した。

おなかに手をやると、手のひらが真っ赤に染まっている。

あたしは微笑んだ。大丈夫だよ雅也。これくらい、何度も殺されたもの。

視界がうっすらと溶け落ちはじめた。雅也は泣いてくれるだろうかと、気になるポイントはやはりそこだった。

「真紀ぃ！！！！！」

雅也が叫ぶ声が聞こえた。

やっぱりちょっと感嘆符が多い感じだけど、それでもいい声してるなあ。

意識を失う瞬間、あたしは呑気にそんなことを思った。

## 7

携帯電話の音で目が覚めた。

リビングから賑やかな着信音が聞こえてくる。枕元の時計を確認すると、まだ朝の六時だった。毛布に顔をうずめていると、しばらくしてやんだ。

昨日はさすがに目が冴えて、なかなか眠れなかった。こんなことならやっぱり実家に泊まって、最後の親孝行でもしておくのだったと思った。

貼られたカレンダーの今日の日付は、ハートマークで囲まれている。

あたしは起き上がって伸びをした。手術の痕が引き攣るような感覚があった。

あのあと、合田は警察に逮捕され連行された。病院へ搬送されるあたしの傍らで、雅也はずっと声をかけてくれていた。あたしが目覚めたとき、彼は泣き腫らした目で、もう絶対君を死なせないと誓った。一生？　と訊くと、一生だ、と頷いた。結局、それがプロポーズになった。

喪失の小部屋は、あれから少しして閉鎖された。もともと趣旨が守られない喪失の濫用に、運営側も疑問を感じはじめていたのだ。

由香里とは一度だけ電話で話した。耕介とは別れ、しばらく彼氏も喪失もこりごりということだった。雅也と結婚することになったと話すと喜んで、刺されたぶんまで幸せになるんだぞ、とあまり嬉しくない祝福をしてくれた。

似たようなサイトはちらほら開設されたが、どれも長くは保たなかった。

きっと皆、気付いたのだ。向き合わなければ何もならないということに。向きあって話そう。大切な相手を本当に失わないうちに。

あたしはペンを取り、ハートマークの中を赤で塗りつぶした。今日は長い一日になる。雅也もそろそろ起き出して、式場へ向かう準備をしているはずだ。

洗顔を済ませてから、携帯を確認した。液晶を見ると、見知らぬ番号が表示されている。式場からの連絡かもしれない。あたしはブラシで髪を梳かしながら、携帯をかけなおした。

〈これ、北原真紀さんの電話？　あんた真紀さん？　根本雅也さんの恋人さん？〉

「そうですけど」

野太い男の声だった。あたしは首を傾げた。

〈こちら渋谷警察署です。これからちょっと署の方にお越し頂けませんか〉

「どういうご用件でしょう」

〈言いにくいんだけど、雅也さんが亡くなられました〉

「……」

あたしは少し間を空けてから、応えた。

「今、なんて」

〈近頃騒がれている連続猟奇殺人鬼のニュースは知ってますかね。被害者の顔の皮膚をドロドロに焼いて、耳ちょん切った上に腹を割いて内蔵をぶち撒けるあれですわ。どうも雅也さん、それにやられたみたいでね〉

「そんな……嘘です！　そんなこと……」

〈ズボンのポケットに携帯があって、あんた恋人さんみたいだったから連絡しました。ホトケが雅也さん本人かどうか、確認してもらいたいんですわ。ちょっと顔だけだと、よくわからんかも

だけど〉
「わかりました。すぐに行きます……」
涙まじりに答えてから、携帯を切った。
思わず微笑んだ。
こんなやり取りは久しぶりだった。結婚式の当日に喪失の疑似体験をやるなんて、いたずら好きな雅也らしい。
化粧を済ませると、鞄を持って部屋を出た。雅也は警察署の前で、にやにや笑って待っているのだろう。
青空から降り注ぐ陽の光が明るい。一生に一度のこの日を、神様が祝福してくれている気がした。
それにしても、さっきの男の声は、誰だったのだろう？　雅也の男友達は大体知っているが、あんな声は記憶にない。
あたしは警察署へ向けて歩いた。角を曲がると、建物の前は人でごった返していた。テレビカメラやマイクを持った人たちが、殺気立った様子で声を張り上げている。集まったパトカーが赤色灯を回している。新たな被害者が、と声が聞こえた。何か大きな事件でもあったのかもしれない。
あたしには関係ないことだ。
あたしは雅也の姿を探した。